

第三回新城薪能

能組

とき 平成四年八月二十二日(土)
午後五時始
ところ 新城市文化会館はなのき広場
雨天の場合は大ホール

入場無料

開会のことば

新城市文化協会会長

山崎 比冬志

仕舞 老

松

太田 温子

地謡 粟谷 明生

連吟

富士太鼓

キリ

新城観世流謡曲同好会有志

火入式

新城市議会議長

新城市教育委員会教育長

加藤 実
中西 光夫

独調

雲雀山

中村 邦生

小鼓 今岡 アイ子

仕舞

実

盛

キリ

鈴木 肇

地謡

粟谷 明生
粟谷 能夫

ごあいさつ

新城市長

山本 芳央

居囃子

草紙洗

大鼓 清水 利高
小鼓 森田 收

笛 今泉 英三

地謡

伊藤 智彦
鳥居 俊男

福田 一二
今岡 アイ子
松崎 和夫
桜井 満

狂言 六地藏

スッパ 畑中 良雄
田舎の人 松井 千

ツレ 中山 伸一
大原 正己
山口 俊一

後見

酒井 宏
加藤 賢一

能
小
鍛
冶

シテ 太田康弘

ワキ 森田 收
ワキツレ 竹内 省吾
大鼓 清水 利高 大鼓 水谷 清
小鼓 永田 六兵衛 笛 今泉 英三

問 佐野 元之助

後見 中嶋 康夫
鈴木 崇史

地謡 竹内 三郎 中村 邦生
田中 洋二 栗谷 能夫
鈴木 肇 栗谷 明生
鈴木 洋一

附
祝
言

(終了予定 八時頃)

主 催 新 城 市 文 化 協 会

後 援 新 城 市

新 城 市 教 育 委 員 会

新 城 市 観 光 協 会

あらずじ

狂言

六地蔵ろくしそう

或る処で今生後生のため六地藏堂を作りました。田舎なので此のお堂に安置する仏様がありません。そこで都へ仏様を求めに上がります。ところが仏師の住所を聞いて来るのを忘れたので大声をあげて仏師を尋ねます。之れを聞いた都の詐欺師が関わりをつけ自ら真仏師と名乗り明日の今時分迄に六地藏を作つてやろうと約束します。

友達を集めました。三人なので三人づつ二度に分けて仏に仕立てます。

そこで……………。

能

小鍛冶こかじ

一条の帝、或る夜不思議な夢で三条小鍛冶宗近に御剣を打たせよとの告げを受け、臣下の橋道成を宗近の私宅に遣わします。宗近は突然の宣旨に驚き、相槌を打つ者が無いのを理由に辞退しますが、帝の御霊夢によるものゆえ必ず作れとの重ねての宣旨に進退きわまり、この上はもはや神力を頼み申すほかに方法はないと、氏神の稻荷明神に祈るべく、身を清めて稻荷に参ります。

すると宗近の目前に一人の童子が姿を現して、御剣を打つてみよとすすめます。誰も知らないはずの宣旨を早くも知っていることさえおかしいのに、童子は数々の名剣奇譚や故事来歴をくわしく物語つて宗近を鼓舞激励します。

宗近があやしんで名を問えば、汝はすみやかに帰宅して御剣を打つ支度をせよ、さすれば力添えしようと言ひ捨てて稻荷山の彼方へ消え失せます。

やがて宗近が鍛冶場に幣帛を供え、一心不乱に祈っていると、さつきの童子が宗近の氏神である稻荷明神の姿となって現れ相槌を打ちに来てくれました。

百万の味方を得た宗近が喜びの槌をちようと打てば、稻荷明神もはつたと打ち、ついに御剣を打ち上げ、表に小鍛冶宗近、裏に小狐丸と鮮やかに銘を入れた物使に捧げて明神は再び稻荷の峯に帰ります。

新城の能楽の沿革

新城の能楽は天正三年（一五七五年）長篠の戦いの功によって奥平信昌が当地に城を築き、翌天正四年その竣工の祝能を觀世与三郎（後の九世觀世右近太夫）を招いて城中二の丸で行った。これが当地の能楽の始めである。

その後、慶安元年に丹波の龜山から菅沼定実が当地へ移封されたが風流な城主で桜渕を開発され、特に能楽を愛好し町民の間にも普及してさかんに行われるようになった。この二代後の定用の家督を祝って元文元年（一七三六年）富永神社の祭礼に本町の氏子が能楽を奉納した。これが例となり年々祭礼能を奉納し、新城能楽社中として親から子へ、子から孫へと連綿として今日まで継承され市の無形文化財に指定されている。

新城能楽社中は、数多くの能面、能装束を所蔵している。

このたび、社中所蔵の装束と面が東京の国立能楽堂に於て十一月四日より展示されることになりました。

謡・仕舞・囃子のお稽古をなさりたい方は文化協会事務局にお申し込み下さい。
それぞれのお世話を致します。